
『黒執事?へGO!』

統合失調症無職青年

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『黒執事？へGO!』

【Nコード】

N 6 5 5 6 M

【作者名】

統合失調症無職青年

【あらすじ】

平成の救世主正義仮面ゼロこと河村英樹が黒執事の原作レイプに怒り、「黒執事関係者襲撃事件」を起こして三ヶ月後。河村はテレビアニメ「黒執事？」のアロイスの所行に怒りを覚える。そんな河村の前にかつて遭遇した悪魔シュトリが現れ、異世界へ通じる扉を開いて河村を「黒執事？」の世界に案内するという。アロイス・クロード主従を懲らしめるため、河村は旅立つ。

第一章 邂逅

今より数十年か、数百年か、数千年前のことは異なる世界。

王座には王が鎮座していた。

「……………よ、俺に余興を用意してくれたらしいな」

配下の者が畏まって答える。

「ははっ、陛下にお喜び頂くため、座興をご用意致しました」

王の眼前に巨大なスクリーンが現れた。

「何が始まる？」

「は、大虐殺でございます。これより一方的な殺戮が開始されます。陛下には、それをご覧に入れましょう」

「ほう。それはまた、面白いな」

ひとりの臣下が進み出て言った。

「恐れながら、陛下に言上仕ります」

「何だ？ 言ってみろ」

王は臣下の顔を厳かに見つめた。

「殺すよりも、もっと他にお楽しみ頂ける方法があるかと」

「な、何を言うか」

座興を用意した臣下とはいえ、顔色を失っている。

「どうしろと？」

「災害に遭わすのです。さすれば、奴らの右往左往するさまがご覧にいきます。死は一瞬の苦しみ過ぎず、死んでしまえばもう奴らの苦しむ様を見ることが叶わなくなります。しかし、災害ならば別、幾度も災害に見舞わせ、散々苦しませてやればよいのです」

「……その方が面白そうだな。うろたえる様子を見るのも、これまた一興」

「お、お待ちください陛下！ 殺されるとき様子はとても言語に尽くせるものではございません！ それを陛下はよくご存じのはずです」

「もういいと言っているだろう？」

「しかし！」

王の顔が不快に歪む。

「くだいな。余がそがれた。気分が悪い。お前はここの俺の命に逆らった。抗命は大罪、お前の役職を取り上げ、降格処分とする。その顔、見たくもない。しばらく謹慎している。近衛兵！」

王の命により、槍を携えた近衛兵たちが臣下を取り囲み、両脇を抱えて連れ出そうとする。

「へ、陛下！ お、おのれー、貴様！ このままですむと思うなよ！」

臣下が後から王に進言した者を睨みつけるが、王の間から無理やり退出させられていった。

二〇一〇年四月某日。

中年男が机に両手を叩きつけた。

「なぜだ！？ なぜこの私が無視される！？ これだけ活躍しているこの私が！ どうなっただちくしょう！ 忘れ去られたというのか！ 2ちゃんでも愛称で呼ばれている私が！ そんな馬鹿なことが……………くそっ！ こんな屈辱、初めてだ！」

「随分とおかんむりだな。何があつた……………よ？」

中年男の顔に驚きが走った。

「な！ 誰だ！ いや、これは幻聴か！ とうとう私は精神に変調をきたしてしまったのか」

「そうではない。そう思いたくなるのも無理もないがな」

「び、病院に行かなければ……」

中年男が電話帳を取りに受話器のところへと移動する。

「まあそう慌てるな」

突如として、電話機が浮き上がった。

「な、なんだこれは！ ポルターガイストか！ お、お前は悪霊なのか！」

中年男の顔はすっかり恐怖におびえきり、ひきつっている。

「それに近いな。それよりお前、腹が立ってしょうがないことがあったのだろう？ 俺が力を貸してやらないこともないぞ？」

「どこの誰かもわからない、お前なんぞに」

今度は電話帳が宙を舞った。

「………！」

「これが俺の力だ。どうだ？ 話してみないか？」

中年男は思いのたけをぶちまけ始めた。

「どうしてよ！ どうしてあたしだけ仲間外れにされるわけ！ も

う、わけわかんないよ!」

若い女がテレビのリモコンを壁に投げつけた。リモコンは破壊され、破片が周囲に飛び散った。

「あたしだつてあんなに頑張ってるのに! . . . あいつめ! 恥かせて! きーっ!」

女は足をじたばたさせ、床を叩く。

「おや、ここにもイライラ人間がいたか」

「だ、誰よ!」

女が周囲を見回すが、女以外に他に人はいない。

「お前の味方だよ。お前に協力してやろうという存在だ」

「ゆ、幽霊!？」

女の顔が恐怖に歪む。

「当たらずとも遠からずだな。憎い奴がいるんだろう? 俺がお前に復讐させてやろうというのだ? 悪い話ではないだろう?」

女は心中を吐露し始めた。

第二章 怒れるニート

メイドが少年主人の世話をしている。しかし、粗相をしてしまう。すると、少年主人はメイドの左眼に指を突っ込み、かきまわした。

「こいつ、なんてことしやるんだ！ 俺の平野綾が！」

ニート・河村英樹はテレビ画面の前に、大声で少年主人を非難した。河村が見ているのはテレビアニメ『黒執事？』の第一話「クロ執事」。漫画家枢やな原作の漫画『黒執事』をアニメ化したもので、第二期に当たる。河村は女性声優水樹奈々演じるアロイスという少年貴族が、平野綾演じるハンナへの蛮行に怒りを覚えたのだった。

しかし、怒ってみたものの、河村はそれほど平野のファンというわけでもなかった。平野の出演作はほとんど見たことはなく、代表作である『涼宮ハルヒの憂鬱』も見ていなかった。

だが、それでも河村は怒っていた。

「こんな奴が主人公だと？ 俺は認めないぞ！ こいつはキチガイ小僧じゃねえか！ 暴君・暗君・狂君だぜ！ 断然シエルの方がましだろ！ 制作は何考えてんだ！ 俺があんだけ倒してやったのに、あれは無駄だったのか！」

河村の怒りは収まらない。シエルというのは黒執事第一期のもうひとりの主人公で、闇の貴族として英国女王の「憂いを晴らす」仕事を行っていた少年貴族であったが、死亡したのか、二期には登場していない。

河村は三か月前の二〇一〇年四月、テレビアニメ黒執事が原作をレイプしたと思い、黒執事の出演者や製作スタッフを次々と襲撃した。その事件すらもある人物によって仕組まれたものであったが、最終的にはその黒幕さえも倒すことに成功していた。

「あー、むしゃくしゃするぜ！　こういうときは、愚痴るに限るな」

河村はテレビを消して、自室に行き、パソコンに手を触れた。知人の廃人無職青年のブログにアクセスする。廃人無職青年もまた黒執事？の視聴者のひとりで、黒執事のファンであった。

黒執事？一話見たが、ひどいもんだっただぜ。アロイスってガキはとんでもないクソガキでイカしてる。あんなのは降板させて、とつととシエルに変わってんだよ。クロードって奴も何も咎めないし。主人が主人なら執事も執事だぜ。廃人無職さんもそう思うだろ？

河村は投稿ボタンを押した。

「なぬ！？」

「書き込みは禁止されています」という表示が河村の目に飛び込んできた。

「な、なんでた、廃人無職さん？」

河村は慌てて廃人無職青年と共通知人である二ト・近藤春雄にメールしてみた。近藤とは二度ある事件とともに戦った戦友同士であつた。

廃人無職青年のブログにコメントできない？ それは当然である。なんせ、ゼロは谷垣をぶった斬った男だからである。あの男はゼロとは話したくないと思われるのである。

近藤からの返信である。河村は廃人無職青年こと谷垣直人が引き起こした事件を解決する際、谷垣を倒したことがあつた。その事件から、まだその月日は経っていないかつた。

近藤が河村のことをゼロと呼ぶのは、河村が好んでテレビアニメ「コードギアス 反逆のルルーシュ」の登場人物ゼロのコスプレをしているためであつた。

（そついや、そうだったな。でもあれはあいつが悪いんじゃないか。俺が相手してやろうつてのに、感じ悪いぜ。あー、またむしゃくしやしてきた）

河村はゼロの衣装と一緒に手に入れたプラスチックの剣を手に入ると、力いっぱい振り回した。そうせざるを得ないほどイラついて

いたのである。

「うおおおおおおおおおおおおお！」

河村は吼えた。心の底からの咆哮であった。しかし、気分は荒む一方である。

「あー、アロイスの野郎をこの剣でぶっ叩けたらなあ。気分がすかっとするのになあ。そんなことにならねえかなあ」

「それが望みか」

「！」

河村一人しかない部屋で、男の声がこだまする。

「あ、悪魔か？」

「さすがにものわかりがいいな、河村英樹。そうだ、昔、少しだけ俺と話したことがあったろう。シュトリだ」

悪魔シュトリは河村が「黒執事関係者襲撃事件」のときに知り合った存在である。

「何の用だよ？ 俺は悪魔なんか呼んでないぞ」

「お前の願望、叶えてやろうと思ってな。黒執事？の世界に入りたくはないか？」

「馬鹿な。そんなことできるわけねえじゃねえか」

河村は鼻で笑うが、完全に否定しているわけではなかった。

「いや、可能だ。代償は支払ってもらうがな」

「代償？」

シュトリと河村は話し合い始めた。

第三章 契約の代償

「えい、えい」

雑木林の中で小学生低学年くらいの男の子がうずくまり、盛んに腕を動かしている。その手には、木の棒が握られている。棒の先には蟻の巣があった。先ほどから男の子は蟻の巣を棒でつついていたのだ。

「おい、そこのがきんちよ、悪さはやめろ！」

「？」

腹の突き出た男が向かってくる。

「ありんこをいじめるな！　ありんこだって生きてるんだ！　こんなことはこの俺が許さん！」

男の子は棒を捨て、逃げていった。

「これでいいのか？」

仮面をつけずに素顔を晒した河村がシュトリに聞いた。

「ああ。次は駅前へ行け。ほじくりとった鼻くそを道端にポイ捨てる中年男がいるから、そいつに注意して鼻くそを拾わせるのだ」

河村は困惑気味であった。

「これは何の罰ゲームなんだよ。やらせることが下らなさを過ぎるぜ」

「無駄口はいい。黒執事？の世界に行きたいのだろう？」

「ちえつ。わかったよ」

「おいこのクソオヤジ！ 身から出た鼻糞回収しろ！」

「次はパチンコ屋に行け。鼻毛を抜いて息を吹きかけて飛ばす奴がいる。鼻毛回収だ」

「おら、お前の鼻毛だろ！ こんなとこに鼻毛捨てんな！」

「今度は眉毛を抜いて飛ばすのがある」

「眉毛なんて抜いてどうすんだ！ 拾えこのやろ！」

「まつげを回収させろ」

「おい、まつげ拾えよ！ そうだ、お前だよお前！」

「耳糞食ってる奴がいる」

「耳糞食つな！ 汚ねえだろうが！ 見てる人が気持ち悪くなるだろ！」

「鼻糞も食ってるのがある」

「鼻糞うまいのか食ったことないから知らんが、とにかくやめろ！」

「くしゃみして鼻水を人に飛ばすのがいる」

「ほら、お前の鼻水だ！ 人に飛ばすんじゃないよ！」

「爪の垢煎じて飲んでる変人がいる。そいつの家の前に行って怒鳴ってやめさせる」

「おい！ お前本当に爪の垢煎じて飲んでるらしいな！ 馬鹿じゃねえのか！ そんな偉い人のか知らないが、とにかくやめとけ！」

「2ちゃんねるとニコニコ動画中毒になっている廃人ニートがいる。外から叫んで注意しろ」

「あんまり2ちゃんやニコ動ばっかやってると、リアルじゃ通用しない人間になっちまうぞ！ ここら辺でやめとけ！ それか時間減らせ！」

「暇さえあれば旦那の悪口ばっか言ってる専業主婦がいる」

「お前旦那のお陰で暮らしていけるんだろ！ 悪口言つもんじゃないぜ！」

「生身の女ではなく、二次元女しか好きになれなくなったキモオタがいる」

「おい、人間諦めんな！」

「メタボがいる」

「痩せろ！ さもないと死ぬぞ！」

「芸能人の追っかけに夢中になり、家庭をおろそかにしている母親がいる」

「現実を見るおばはん！」

「同じ人間から何度もティッシュをもらっている奴がいる」

「せこい真似すんな！」

河村は走った。走って走って走り回った。全身汗だくになった。

「ふう。もう、いいだろ？」

河村が汗をぬぐいながら言った。

「そうだな。今はこれくらいにしといてやるか」

「まだやらせるつもりなのかよ。勘弁だぜ。俺は完全にただの頭が
かわいそうな人じゃねえか」

「まあそう言っな。捕まるわけじゃなしに。さあ、家に帰って支度
しろ」

「よっしゃ！ ついに俺の新たな冒険の門出というわけだな。わくわくするぜ」

河村は意気揚々と帰路を急いだ。

そんな河村の様子をつぶやに見物している者がいた。

「……様、奴は、河村はどうなりましたか？ もう黒執事？の世界へ旅立ったのですか？」

中年男の声がその者の耳に届く。

「いや、まだだ。しかし、もうじきそうなる。そう急ぐことはない。奴らが侵入した暁には、すぐさまお前に知らせてやろう」

「はい。心待ちにしております」

中年男の目は充血していて、何やら興奮している様子であった。

第四章 王道を行く

河村は家に着くなり、着替えとバスタオルを持って風呂へと向かった。

「汗かきまくったぜ。こりゃあ、シャワー浴びねえとやってらんないぜ」

「構わん。好きなだけ浴びろ」

風呂から出ると、河村は冷蔵庫からポカリスエットのペットボトルを取り出し、氷を入れたガラスについだ。

「水分とらねえとな。熱中症とかこええし。下手したら死ぬらしいからな」

「飲め飲め」

河村は自室へ行くと、クーラーのリモコンを手に取り、クーラーを起動させる。

「クーラーない時代とか、もう考えられないよな」

河村は以前道端でもらった団扇を盛んに仰ぐ。

「……谷垣の野郎、何もアク禁にすることはねえだろうが。あいつが悪いのによお。けっ」

なぜだか知らないが、河村はコメントを投降させなくした谷垣に

対して怒りが沸いてきた。

「おい」

「ん？」

「河村、お前何か大切なこと忘れてないか？」

「あつ！ そうだった！」

「思い出したか」

「今日は俺が好きな漫画の新刊の発売日だった！ すっかり忘れてた。助かったよ、シュトリ。ちよっくら今から本屋行ってくるわ」

「………河村」

「ん？ まだ何か忘れてることあったか？」

「お前、俺のことからかってるのか？ あまり舐めた真似するなよ」

「な、なんだよ突然」

怒気を孕んだシュトリの声にたじろぐ河村。

「お前、黒執事？の世界に行くんだらう？」

「！ そうだったそうだった！」

河村の顔が驚きで満たされた。

「そしてアロイスたちをそのプラスチックの剣で叩きのめすのだから?。」

「そうだぜ」

「なら、準備しろ」

「オーケー。戦闘準備開始だ」

河村は衣裳箆笥からゼロ服を取り出し、身につける。プラスチックの剣も忘れずに腰に差した。

「これを置いてはいけないよな」

河村はリュックサックに入れるだけテレビアニメのサウンドトラックを詰め込み、ラジカセを持った。河村はアニメソングやアニメのサントラを聞くと能力が向上、強くなるのだった。

「準備できたぜ」

「よし。トイレの前に立て」

「なんで?。」

河村はきょとんとしている。納得がいかないようだ。

「黒執事?の世界に通じる扉を開くことができるのは、ここら辺ではこここの便所しかないのだ」

「そついうもんなのか。なら、しょうがないな」

河村はトイレの扉の前に立つ。

（ただお前をからかつてるだけだ。馬鹿な奴）

「目を閉じて、扉を開け、中へ入れ」

河村はシュトリの指示通りにした。

木を踏んだような音がした。河村が目を開けると、そこは別世界であつた。辺り一面、木々が立ち並ぶ森の中であつた。

「ほ、本当に俺は黒執事？の世界にやって来たのか？」

河村は未だに信じられない様子である。

「本当だ」

「・・・・・・・・」

河村は辺りを見回す。緑一色である。

「シュトリ」

河村が問いかける。

「何だ？」

「何でトランシー邸じゃなくて、森の中なんだ？」

河村が疑問を率直に口にする。

「決まってるだろう。そんな簡単に敵のアジトにたどり着いたら、RPG的ドラマチックな展開が楽しめないじゃないか。常識だろう？」

「お前の常識は知らない。さっさとトランシー邸に飛ばしてくれ。お前の力ならできるはずだ」

「お断りだ。お前は旅をしなければならないのだ、河村。それが王道というものだ。王道には黙って従うべきだ。違うか？」

取りつく島もないシュトリの態度である。しかし、なおも河村は食い下がる。

「お前の王道も知らない。早く俺を連れて行け」

シュトリは返事をしなかった。

「………わかったよ。旅をすればいいんだろ。最初はどこに行けばいい」

「その気になったか。いい心がけだ。まずはあそこに行くべきだろうな」

「どこだ？」

「邪の道は蛇。ラウの所だ。奴なら、トランシー邸の場所を知ってるかもしれない」

「はいはい、了解。で、どこをどう歩けばいいんだよ？」

「まずはこのけもの道をまっすぐ行け」

河村はシュトリの指示のもと、歩き始めた。

第五章 暗闇の中の勇者

河村はけもの道に行く。行けども行けども木々が聳え、草木が繁茂し、鳥のさえずりが聞こえてくる。

河村は早くも現状に苛立ち始めていた。業を煮やしてシュトリに訊ねた。

「・・・・・・・・シュトリ」

「どうした？」

「俺もつけっこう歩いたよな？」

「まあ、そうだな。それが何か？」

「いつになったら森を抜けられるんだよ？」

「・・・・・・・・そうだな。半日が、二三日か、そこら辺かな」

「半日！？ 二三日！？ マジかよ！？ ・・・・・・・・ふざけんな
！」

河村はいきりたった。

「何をそんなに怒る必要がある？ アロイスを懲らしめたいのだから？ あのとのお前の怒りはどこへいつてしまったのだ？ この程度のことです、投げ出すつもりか？ 情けない」

「うつ！　しかしだな、そんな何日も歩き続けられる自信は俺にはない」

「気合だ気合。根性だ。度胸を見せてみる。強靱な精神を以てすれば、越えられぬ難局などない」

「本当かよ……………」

「さあ、お喋りは終わりだ。歩け。歩くんのだ。日が暮れるぞ？」

「ちえっ」

河村は仕方なくまた歩を進めた。

日が暮れようとしていた。

河村の腹が鳴る。

「あー、腹減った」

「河村よ」

「何だ？」

「お前、馬鹿だろう？」

「だしぬけに何を言い出すんだよ？」

「どうしてお前は食糧をもつてこなかったんだ？ ラジカセやCDなど何の足しになる？ それから、懐中電灯とか、もっと持つてくべきものがいろいろあつただろう？」

「！」

河村ははたと気がついた。しかし、時は遅すぎるほど遅すぎた。

「頼む、家に帰らせてくれ。そしたら、いろいろ持つてくるからさ」

「駄目だ。一度始めた冒険は止められない。それが王道だ」

「また王道かよ。お前のルールはもういいよ」

「お前が家に帰れるとしたら、冒険でしくじって死に、魂だけとなつて帰宅するときだけだ」

「死ななきゃ帰れないのかよ。ひでえな、おい」

「……それより、もう日も落ちてきた。暗闇での移動は危険だ。今日はここらで野宿だな」

河村はきよろきよろと周囲を見やった。

「森のど真ん中じゃねえか。猛獣とか襲つてくんじゃねえの？」

「かもな。だとしても、運が良ければお前は生き残ることができるだろう」

「……………うええ。テントとかもねえし、文字通り野宿じゃねえか」

「自業自得だな。普通、言われなくとも持ってくるものだろうに。お前は何を考えていたのだ？」

「いや、さくつとランシー邸に行つて、さくつとアロイスたち倒して、すぐ家に帰つて、本屋行つて漫画買つて家で読むつもりだったが」

「安易な考えだな。物事を甘く考えすぎている。お前はいつもそんなのか？」

「……………寝るわ」

「寝ろ」

河村は地べたに横たわつた。

数分後。

「空腹で眠れねえ」

「知らん」

「お前アレだ、能力でなんか食いもの出してくれ」

「なんでそんなことを俺がしなければならぬ？ お前が用意してこないのが悪いんだろう？ お前の失態だ。自分のミスは自分で補填しろ」

「俺が飢え死にしてもいいってのか？」

「それならそれで仕方ないな」

「何て奴なんだ、お前は。悪魔だ！」

河村は大声でシュトリを罵った。

「だから悪魔だと言ってるだろう」

「くそっ！ なんか食いもの探してくる！」

「勝手にしろ」

真っ暗で何も見えない。食料が探せるはずもない。

「くっそー！」

たまりにたまった不満を爆発させた河村は、闇の中で手探りで食料を探した。何かが手に触れた。どうやら葉のようだった。

もうどうにでもなれと河村は思い、葉をちぎって口の中に放り込んだ。苦い味がした。

「そんなもの食べて大丈夫なのか？ 無謀な男だな。ある意味、勇敢とも言えるが」

シュトリの冷たい言葉を無視して河村は葉や草と思われるものを次から次へと口に入れた。いくら食べても満腹にはならなかった。

第六章 土下座男

鳥の鳴き声が聞こえる。河村は目覚めた。朝だった。まだ早朝とい
っていいだろう。

「起きたか。調子はどうだ？」

「う、ううううう。は、腹が……………」

河村が苦しげに顔を歪ませ、腹に手を当てた。

「だから言っただろう？ 草や葉なんか食べて大丈夫かと」

「く、空腹で仕方なく……………。がむしゃらに食いまくって何
とか空腹は収まり、眠れたのに……………。う、くう……………」

「

「異世界に旅に出るというのに、ろくな準備もせず、水や食料さえ
ももってこず、無用なラジカセにCDをリユックいっぱいに詰め込
み、腹が減ってわけのわからん草や葉を食いまくり、その拳句に腹
痛、そして食あたりで死亡、か。それがお前の人生なのか。拍子抜
けるほどあっけなく、どじでまぬけな最期だったな。まあ、お前
の馬鹿さ加減は見ていて少しは楽しかったが、礼を言わせてもらっ
たほどのことでもないな」

「お、お前、さっきからボロクソ言いすぎだろ。しかも死亡とか。
俺まだ生きてるぜ？ お前能力あるんだろ、何とかしてくれよ。．．
．．．．．うお!？」

「今度は何だ？」

「や、やばい。出そうだ。たぶん下痢だ。どうしょ？」

「そうだな、この先を少し降りたところに、小川があるようだが。そこで用を足すといい」

「トイレットペーパーは？」

河村は不安げに聞く。

「お前、持ってきたか？」

「いや……………」

「それなら、ないだろ」

「……………」

河村は尻を手でおさえながら、恐る恐る移動し始めた。

河村は一生懸命に尻に水をかけ、手でこするようにして洗っている。下半身は裸である。

「ちょっとした自然破壊をしたな、河村」

「やりたくてやったんじゃないよ」

「野糞とは、都会に住んでいてはできない経験をしたな。これは貴重だぞ？ 一生ものに違いない」

「うるせえよ、お前」

河村は狂ったように手を洗った。

「自分のものじゃないか。何をそんなに気にする必要がある？」

「俺は綺麗好きなんだよ。お前いちいちうるせえのな」

「もういいだろう。出発だ」

河村はズボンを履き、歩き出す。

「どう歩く？」

「この雑木林を突っ切る」

河村の眼前には雄大な自然が広がっていた。木々がぼつぼつに立ち並んでいた。

「こんなとこ通れんのか？ 服が木に当たってぼろぼろになるんじゃない？」

「俺の知ったことじゃない」

「けっ。何なんだよ」

「ここを突っ切れば、道に出る。ついていけば、馬車が通るかもしれない。何とか拾ってもらって、ラウの屋敷に向かうように仕向けるんだな」

「わかったわかった」

渋々河村は雑木林の中に入っていく。

河村は雑木林を抜け、開けたところに出た。街道である。

「ふう。しかし、よく裂けたな。どうしてくれるんだよ、これ？」

河村自慢のゼ口服はそこら中が裂けてしまっていた。

「何か支障でもきたすのか？」

「気分の問題だ」

「なら、問題ないな」

「ちえっ」

河村は何度目かの舌打ちをした。

「ほら、馬車が来る。お前はついてるな。止めて乗せてもらえ」

馬車が近付いてくる。

「日本語通じんのかよ」

「日本のアニメだ、通じるさ」

河村は街道に立ち塞がり、大きく両手を振り、大声を振り絞った。

「おおーい、止まってくれー！」

「どう！ どうー！」

御者が馬車を止め、河村を見る。

「何だねあんたは？」

「俺は平成の急逝者正義仮面ゼロ！ アロイス・トランシーを倒すため、この世界にやって来た異邦人だ！ 奴の場所を知っているかもしれないラウという中国人に会いにいきたいんだ！ ラウの館を知らないか！」

御者は困惑を隠さない。

「何を言っているのか、さっぱりわからないよ。今すぐそこをどいておくれ。旦那様は急いでおられるんだ」

「俺だって急用だ！ いつまでもここにいられない！ 早く日本に帰って漫画買って読まなきゃならないんだよ！ それに見てるアニメだってあるし！」

「知らないよ。いいからどいてくれ」

「頼む。この通りだ！」

河村はその場に両手をつき、御者に土下座した。

「乗せてくれ！ ラウのところへ連れてってくれ！」

「ラウもトランシーも知らないよ。さあどいたどいた」

御者が手を払った。

河村の中で激しい怒りが突然渦巻いた。

「この野郎！ 人が土下座までして頼んでなのに、なんだその態度は！ うおおおおおおおおお！」

河村は剣を引き抜くや、跳躍、御者の頭を打った。御者は倒れ込んだ。

「そつこなくつちな、河村」

シュトリがにんまり笑って呟いた。

第七章 強盗男に転職

「！」

河村に御者が打ち倒されたのを見て、馬車に乗り込んでいた紳士は目を剥いた。河村は扉を開け、ずかずかと馬車に侵入し、剣を紳士に突きつけた。

「お、おいはぎか。か、金なら、全部やる」

「金？ 金なんか」

「もらっておけ。後々役に立つかもしれん。金はいくらあっても困らないだろう」

紳士は泡を食いながら、財布を取り出す。

「ああ、そうだよ、俺はおいはぎさ。それもとびきり凶悪な。俺を怒らせると、おっさんの身がどうなるかわからねえ。その金もらうぜ」

河村は自分の口からとんでもない台詞が飛びだしていることに自分でも驚いていた。財布を受け取る。

「この馬車は俺が頂く。降りろ。それから、このことは忘れろ。警察になんか言いやがったら……。ひひひひひひひひ」

河村は悪漢を演じることにした。

「わ、わかった」

紳士は慌てて馬車から降りると、脱兎の如く駆け出し、逃げた。

河村は御者を道端に放り投げ、その位置に陣取った。

「俺に馬なんか扱えるのか？」

「やるしかないだろう？」

河村は鞭を振るった。

「はいやー！」

馬車が動き出す。

「道を教えてくれ」

「しばらく行くと分かれ道がある。そこを右折しろ。その先にちよつとした街がある。そこで食料その他を調達、駅もあるから、そこで列車に乗り、ロンドンを目指せ」

「全然着かねえぞ？」

河村はまたしてもイラつき始めていた。

「そついうものだ」

「……俺って御者の資質があるかも。日本に帰ったら、御者になるのかなあ」

「なりたければなれ」

「お前もつと友好的になれないのか？」

「俺がお前に協力しているのは、お前が観察していてそこそこ退屈しない人間だからだ。お前と俺の関係はそれだけのものでしかない。そこを理解しろ」

「へっ」

人里が見えてきた。これがシュトリが言っていた街なのだろう。

「さあ、買い出しだ」

河村は馬車から降り、散策を開始した。

「コンビニも弁当屋もないよなあ。おにぎりなんかないだろうし、そもそも和食はないよな」

「当然だ」

「英語のカンバンばかりじゃねえか。読めねえよ」

「品物を見ればよいだろう。それで察しろ」

「へいへい」

河村はパン屋とおぼしき店を発見し、店内に入る。不思議な格好をした河村に店員は面食らったふうであった。

フランスパンがかごの中に陳列されている。

「もうこれでいいや」

河村は腕の長さほどのフランスパンを七つ購入した。

「言っただ通りだ。金を奪っていて正解だったろう？」

「ああそうだよ、お前の言うことが正しかったよ。よかったよかった」

「なぜフランスパンなんだ？ しかも七個も」

「長いし、太いし、大きいし、なんか腹もちしそうじゃん？ これ一個で一日はいけるな。七個で一週間分だ。一週間以内にけりをつけてやる」

「そうか」

「駅はどこだよ？」

「人に聞け。たくさん歩いてるのがいるじゃないか？」

河村は中年女性に声をかけ、駅までの道順を聞き出した。

駅に着いた。切符を買い、ホームへ行く。

「早く列車来ねえかなあ。待ってるのは暇だ。つまらん」

「暇はいつものことだろう？」

「そつだよそつだよ、俺は毎日が日曜日だよ。それがどうしたってんだよ」

「事実を指摘したまでだ。そう怒るな」

どれくらいの時間が経過したろうか。列車が駅に入って来た。

河村はフランスパンを抱えながら、列車に乗り込む。

窓を見た。

「いかにも十九世紀って感じだな」

初めは新鮮だった風景も、段々見飽きてきた河村であった。

睡魔が襲ってきた。

「やばい、眠くなってきた」

「眠ったら、スリとかに荷物を盗まれるかもな」

「くっそー！ そんなことさせてたまるか！」

河村は目をかっと見開いたが、所詮無駄な抵抗だった。河村は舟を漕ぎ始めた。

第八章 乞食街

けたたましい音が鳴り響く。列車の汽笛で、河村は目を覚ました。

「気がついたか。もうロンドンだ」

「なんか都合いいな」

「アニメだからな」

河村は列車を後にした。

「これからどこをどう行けばいいんだ？ ロンドンは大都会なんだろう？」

「通行人に地道に聞いていくしかないな」

「なんだそりゃあ。お前へのサポートはなしか？」

「ないな」

「・・・・・・・・」

「ほら、聞きに行け。まずは駅員にでもラウの屋敷の居場所を聞いてみるんだな」

河村は駅員に話しかけた。

「知らないじゃねえか」

「片っぱしから聞いて回るのだ」

河村はやけくそ気味になって聞いて歩いた。

数時間が経過した。既に聞いた人数は三桁に上っていた。

「誰も知らねえじゃねえか」

「まあ、あいつは有名人じゃないんだろうな。ここでお前の旅も終わりか。意外な結末だったな。まさか、ラウの居場所さえ掴めずにジ・エンドとは」

「勝手に人の旅を終わらせるなよ。……そうだ！」

河村は何か閃いた。

「どうした？」

「お前言ってなかったか？ 邪の道は蛇ってな」

「ああ。それで？」

河村は速足で歩いていく。路地裏へ入る。

「こんな場所に行つて危険じゃないのか？」

「あいつはな、一期でなんかやばそうなとこに居たんだよ。二期もきつとそうだ」

風景が一変し、危ない雰囲気なたたえた人間たちがたむろする空間に出た。どことなく汚れていて、不潔な感じがした。

乞食たちが薄汚れた毛布に包まって眠っている。河村は乞食に付き、揺さぶつて起こす。この世のものとは思えぬ悪臭が鼻につく。

「おいこら、起きろ乞食！」

「？ なんだよ」

乞食は目をしょぼつかせながら、河村を見つめた。

「お前、ラウつて中国人を知らないか？ 表向きは貿易会社『崑崙』の英国支店長だが、裏の顔は上海マフィア青幫の幹部の男だ」

「ラウ？ 知らんね」

「ちえつ。また外れかよ」

河村は乞食に限らず、汚い路地裏に居る人間すべてに聞き込みを行つた。

「おい、あんた」

「うん？」

河村が振り返ると、シナ服を着た男が三名、立っていた。

「随分ラウさんにご執心らしいじゃないか。何を探ってるんだ？」

（しめた！）

「やったじゃないか、河村。お前が馬鹿みたく嗅ぎまわった甲斐があつたというものだ」

（どこまでも嫌な奴だな、シュトリ）

「そうだ、俺はラウに用がある。ラウに会わせてくれ。俺にはこの世界で果たさねばならない使命があるのだ」

「何言つてやがる。ここがおかしいのか？」

男は自分の頭を指差した。

河村の中でまたしても何かが弾け飛んだ。気がつくと、地を蹴っていた。

「はいやあたたたたたほわちゃあちよー！」

河村の拳が男の顔面に埋まっていた。

「ぐふほおっ！」

男は崩れ落ちた。

「このっ！」

二人目が殴りかかってきた。河村は右へ飛び、攻撃を避け、また飛んだ。

河村の蹴りが二人目の腹に食い込んだ。

「お、おおおお！」

男が地に転がり、悶絶する。

残った一人は呆然としている。河村は素早く近寄り、男の襟首をつかみ、拳を男の頬につけた。

「しゃべってもらおうじゃねえか。ラウはどこにいる？ 俺はなあ、あまりの空腹のため、しょうがなく草や葉っぱ食って川で下痢ぴーしてトイレトーパーもなくて、しょうがなく素手でけつを洗って、そんなこんなで、ちよっと腹立ってんだ。これ以上俺を怒らせるな？」

男はわなわなと震えだした。

第九章 藍猫との戦いにて、河村英樹死す

「ここがラウの居場所か」

河村は路地裏から随分歩かされた。着いた場所は日の当たらない、薄暗い空間であつた。まさにそう、阿片窟と呼べる場所であつた。人をよせつけない雰囲気を漂わせていた。

「案内御苦労。もう眠っていいぜ」

河村は中国人の首筋に手刀を叩きこむ。男は昏倒した。

河村は奥へと入っていく。

シナ服を着たラウがいた。扇をあおり、涼をとっている。

「ラウ！ 俺は平成救世主正義仮面ゼロ！ 狂人貴族アロイス・トランシーに懲罰を加えるため、異世界からやって来た正義漢だ！ トランシー邸の居場所をさっさと教えろ！ 俺は忙しいんだよ！」

「ゼロ？ なかなか面白い格好をした珍客だね。謎めいていて、大変興味深い。我のことを探っていたのは君だね？ そうか。君は彼を止めに来たというわけか。しかし、本物の狂気をどうこうすることなど、常人にはできはしない。狂える魂は暴れまわるのみ。君はただの傍観者に終始することになる。諦めて元居た場所に帰るといい」

ラウは目を閉じたまま、涼しげな顔で言った。

「何を言うか！ 俺はここに来るまで、草食ったり葉っぱ食ったり、野糞したり、馬車を奪ったり、いろいろやってきたんだ！ 今更引き返せるか！ トランシー邸の場所を言え！ 言っただ！ 言わないと、ためにならないぜ？ ラウ！」

「はあ。仕方ない。藍猫！」

ラウは開眼し、義妹の名を呼んだ。ラウの背後から、錘をもった藍猫が現れた。チャイナドレスで身を包んでいる。

「珍客をもてなしてやってくれ」

「はい、兄様」

藍猫が走り寄ってくる。

河村は余裕の笑みを浮かべていた。

「お前らは知らないだろうが、俺はかつて遊佐浩二と矢作紗友里と戦い、打ち破った経験があるんだ！ 俺が負けるはずはないんだよ！ さてと、ラジカセラジカセと」

河村は手早くラジカセを置き、リュックサックからCDを取り出し、セツトする。

「よしと。これで勝利はもう目前だな」

藍猫が目と鼻の先に迫ってくる。しかし、いつまで経ってもラジカセは鳴らなかった。

「どうなっただよ？」

河村は不安になってきた。ラジカセをいじくりまわす。

「どうやらこの世界に来る際に壊れてしまったようだな」

シュトリが冷静に説き明かした見せた。

「な、なに！ 俺のラジカセ作戦が！」

藍猫が錘を振り下ろす。河村は慌てて避けた。錘が地面を叩いた。

「ラジカセがねえと、俺は勝てねえ！ くそ！ 動け！ 動けよ！」

河村は手でラジカセを叩いた。藍猫が目が光った。河村の腹を錘がえぐった。

「じふお！」

河村は仮面の中で吐き、地面に跪いた。

「あれ、随分とあっけなかったね。大口叩いてたのに」

ラウは拍子抜けしたようだった。

「つまらないな。残念だよ。もっと楽しませてくれると思っていたのに。もついい。藍猫、その頭に被っているのを取ってやって。殺しているよ」

藍猫が河村から仮面を剥ぎ取った。河村は激痛のあまり、何の抵

抗もできなかった。声も出せない有様である。

「うん、お腹が出てた感じから見てもわかったけれど、ただの太ったお兄さんだったね。はい、おやすみ」

藍猫の錘が河村の脳天を直撃した。

「う、うあああああああああああああ！」

河村は悲鳴を上げた。周囲の風景が変化していた。見覚えのある室内。河村は自宅のトイレの前に立っていたのだった。

「？ 俺は死んだはず」

「ああ、ゲームオーバーだったな。しかし、殺されたと言っても、所詮アニメの世界での話。ここで死なない限り、お前は死なんのだ。安心して何度でも死ねるな。いいだろう？」

「何がいいんだよ。だったらお前も殺されてみるよな」

河村は不機嫌の極みだった。

「さて、もう一回挑戦するか」

「いや。なんか殺されて腹減ったわ。まずは腹ごしらえだ」

河村は床に置かれた紙袋を見た。フランスパンが七個入っている。

「あつちでゲットしたのも、持ち帰れるんだな」

「ああ。いいだろう？」

河村はフランスパンを手に取り、かぶりついた。

「うまいか？」

「普通」

河村は一心不乱にフランスパンを食った。やけ食いと言えた。

第十章 約束の力

ラウは予想外の事態に心底驚いていた。

「どういうことだ？ なぜ死体がない？ 消えたというのか？」

河村敗死をつぶやに見物している者がいた。

（河村は敗れたか。しかし、これで終わりではないだろう。奴は何度でも黒執事？の世界に侵入し、戦いを挑んでいくだろう）

「河村は、河村はどうなりましたか？」

中年男が聞いてきた。

「奴はラウと接触したが、トランシーに関する情報を聞き出せなかったばかりか、藍猫に叩き殺されてた」

「死んだんですか！ やった！ ざまあみろ！」

「喜ぶのはまだ早い」

「なぜです？」

「あの世界でいくら死んでも、こちらの世界で死なない限り、本当の死は訪れないのだ」

「なんですと！？　ちつくしょう！　河村め、くたばらないのか！」
「だが、ひとつだけ方法がある。お前たちの協力が必要だがな。それは・・・・・・・・」

河村はフランスパンを一個食べ終えると、歯磨きを始めた。

（しかしあれだな、ラジカセが使えないとなると、どうすりゃいいんだ？）

「至って簡単だ。お前が歌えばいいだろ？」

（お、お前、人の考えが読めるのか！？　聞いてねえぞ。それに俺は歌歌うのはうまくないんだよ）

「お前が聞かなかったただけだ。これから女とデートに行くわけでもないのだから、歯磨きはそれくらいでいいだろう。トイレの前に立て」

河村は口をゆすぎ、洗面所に吐き出す。

「あいつらに勝てる気がしない。奴らは裏世界のプロだからな」

「お前のお得意のなんとか拳をお見舞いしてやればいいじゃないか。これまで幾人も敵を倒してきただろうに」

「これまでの敵は素人が多かったけどな。そうだ！」

河村はリュックサックからCDを取り出し、ラジカセにセッティングした。

「何をする気だ？」

「今聞くんだよ。そしてテンションが上がってきたところで、あっちに行く。そうすりゃ、楽勝だぜ」

「ほう。そうか。そう思うのなら、そうすればいい」

僕等 空高く君を守ってく

強さ 儚さのこの羽で

温もりを教えてくれた 悲しみを拭ってくれた

愛情は君の手のひら 滲んだ空に 未来を想った

河村が流した曲はムックが歌う「約束」、テレビアニメ「閃光のナイトレイド」のオープニングテーマだ。

「うおおおおおおおおおおおおおおおお！ キター！ キタぞ！ 今だシュトリ、俺をあっちに送ってくれ！」

河村は腰の剣を引き抜いて、トイレの前に立った。

河村は藍猫の眼前に移動していた。

「今 僕等 空高く君を守って 強さ儚さのこの羽で 限りある
明日への記憶 サヨナラは君の腕の中 どこまで行けるだろう？
遙か遠い夜明け 深く息を止めて最後の約束さ」

河村は歌詞を呟きながら、藍猫に斬りつけた。藍猫は河村の突然
の出現に驚愕していたが、その剣を受け止めた。

「お前は！ 今までどこにいたというんだ！？」

ラウは河村に驚きの視線を送る。

「ゼロは滅びぬ！ 何度でも蘇る！」

河村が笑顔で言った。その笑みは仮面に隠れてラウと藍猫には見
ることはできなかったが。

「な、何だと？ どういう意味だ？」

今度は謎めいた台詞が多いラウが面食らう番だった。

河村は激しい斬撃を次々と藍猫に送った。藍猫もそれについてき
ている。

「ここから明日へ行ける　ずっと君のそばで　深く息を止めて　最後にありがとう。うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！　約束パワー！」

河村は藍猫の右手首を強く打った。能面のような藍猫の表情に初めて感情が表現された。痛みで歪む顔。

河村は藍猫の動きが鈍った隙をつき、藍猫の肝臓を狙って突いた。藍猫が崩れ落ちる。

「藍猫！」

ラウが壁に立てかけてあった青竜刀を手を取った。

「よくも藍猫を倒してくれたね。ただの太った男だと思っていたが、我が間違っていたようだね。我はシマを荒らす者に容赦しないよ」

ラウと河村は対峙し、激しく睨み合った。

第十一章 「おかしな奴に負けるなんてね」

「はあああああああああああ！」

ラウは地を蹴った。河村に斬りつける。河村は剣で受け止めた。

ラウの青竜刀が半分ほど河村の剣に食い込んだ。

「！ プラスチックじゃ鉄には勝てねえか！ ちいっ！」

「プラスチック？ 何のことだい？」

河村は剣を捨て、藍猫の錘を拾い上げた。再び河村をラウが襲う。河村は何とか錘で攻撃を防いだ。

「うおおおおおおおおおおおおおおお！ アニソンよ！ 俺に力を！」

「アニソンて何のこと？」

ラウの疑問を無視して、河村はまたも歌い始めた。

「夢のつづき 追いかけていたはずなのに 曲がりくねった 細い道 人につまずく」

河村が口ずさんでいるのは、YUIが歌うテレビアニメ「鋼の錬金術師FULLMETAL ALCHEMIST」のオープニングテーマ「again」である。河村の好きな曲のひとつだった。

二人は激しく競り合った。鳴り響く金属音が戦いの激しさを物語っていた。火花散る戦いである。

「罪の最後は涙じゃないよ　ずっと苦しく背負ってくんだ　出口見えない感情迷路に　誰を待ってるの？　白いノートに綴ったように　もっと素直に吐き出したいよ　何から　逃れたいんだ　・・・現実ってやつ？　うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！　乗って来たぜ！」

河村の動きが加速する。

「ちiiiiiii！」

ラウが苦虫を噛み潰したような顔をして舌打ちする。手が痺れてきたのだ。

「もらったあああああああああ！」

河村はラウの右肩を打った。

「うっ！」

ラウの手から青竜刀がこぼれ落ちた。

「どうだ！」

河村は錘をラウの鼻先に突きつけた。

「我の負けだよ。君、なかなかやるね」

「さあ、喋ってもらおうじゃねえか。アロイス・トランシー邸の居場所を吐け」

「あのさあ」

ラウが右肩をさすりながら言った。

「何だ？」

「我、アロイスとか知らないんだけど。……誰？」

「……悪い予感はしていたが、まさか予定調和のオチだったとはな。無駄足だったか」

河村の顔が悔しさでにじむ。

「まあ、こういうこともあるさ。気にしないことだ、河村」

シュトリが口を挟んできた。

「お前、こうなることは最初からわかってたんじゃないのか？」

「いや、我は予想外の君の強さに驚きを隠しきれないでいるよ」

「お前に言ってねえよ、ラウ。こつちの話だ」

「？」

ラウは腑に落ちない。

「結局、振り出しか。次はどこに行けばいいんだよ」

「我に聞かれても」

ラウは困惑していた。

「だからあ、お前に言っていないって」

「じゃあ誰に言ってるんだい？　ここには我と君しかないのに。あれかい、何かの病気なの？」

「うるせえなあ、お前は黙ってるよ」

河村はラウに苛立っていた。

「だって君が独り言を言うから」

「ああそつだよ、どうせ俺はおかしいんだよ、どうだ、これで満足か」

河村は面倒臭げに言い放った。

「おかしな奴に負けるなんてね。藍猫ともっと鍛練を積まないといけないな」

「賑やかで楽しそうじゃないか、河村」

シュトリがちゃちゃを入れる。

「いいから、どうするんだよ」

「ラウで駄目なら、次は葬儀屋だな。奴は裏世界の情報に精通している。その道のプロだ。トランシーについても何か知っているだろう。今度は収穫があるはずだ」

「葬儀屋か。おい、ラウ！ 葬儀屋の店に行く道順を教えろ！」

「葬儀屋か。知ってるけど。今度は彼を倒すつもりなのかい？」

「必要ならな」

河村はラウから道順を聞き出すと、踵を返した。

「ゼロ、君の行く手にはかつてないほどの困難が待ち受けているだろう。それでも君は、歩みを止めないつもりなのか？ 後悔することになるかもしれない」

ラウが河村の背に語りかけた。

「後悔？ そんなもん、ニートになったときから、ずっとしてるぜ」

「ニート？ 君は我が知らない単語ばかり使うんだね。いったい何者なんだ？」

「俺は平成救世主正義仮面ゼロ。正体を明かさないのが、ヒーローの法則つてもんだ。じゃあな。邪魔したぜ」

「ヒーロー……」

河村はラウから見送られながら、走り出した。

第十二章 器物損壊男

河村の姿が葬儀屋が営む店の前にあった。

「今度こそ情報を掴まねえとな」

河村はドアノブに手をかけ、店内に入った。無人である。

「おーい、葬儀屋、いねえのか？」

河村は声を出しながら、店内を見渡したが、人の姿はない。

「ヒツヒツヒツヒツ、小生に何か御用かね？」

棺桶が開き、葬儀屋が姿を現した。

「うわっ！ お前なんつうところから出てくるんだよ。びつくりするじゃねえか。俺が心臓発作で死んだらどう責任とつてくれるんだよ」

「小生が棺に入れて、丁重に弔って差し上げるよ。さすがに墓参りまではしてあげないけどね」

「縁起でもねえこと言いやがって。．．．．．そんなことはどうだっていいんだ。俺はアロイス・トランシーの館がどこにあるか知りたいんだ。頼む、教えてくれ」

「蜘蛛か。館の場所なら、小生は知ってるよ」

「本当か！」

河村が目を輝かした。

「でも、ただとはいかない。小生に極上の笑いを提供してくれたら、教えてあげよう」

「そういえば、お前はそういう奴だったな。極上の笑いか。俺には難しいな」

「そうか。なら、この話はなかったことになるね。小生はもうひと眠りさせてもらうよ」

葬儀屋は棺桶の扉を閉めようと扉に手をかけた。

「ま、待ってくれ！ 今言うからさ！」

河村は棺桶の扉を掴んだ。

「早くして欲しいな。小生の大切な昼寝の時間を奪わないでくれ」

河村はしばし考え込んだ。

「やっぱり駄目だ！ 俺には笑いの才能はない！」

「話は終わったね」

葬儀屋は再び扉を閉めようとする。突然、河村は土下座した。この世界に来てから二度目の土下座体験であった。

「葬儀屋！ この通りだ！ 俺はマジキチ貴族アロイスを倒さねば

ならないんだ！ 俺の正義感が俺にあいつを倒せと囁くんだよ！
トランシー邸がどこにあるか、教えてくれ！ 頼む！」

「笑わせてくれないんだったら、教えないよ。小生も慈善事業をやっているわけではない。他をあたってみることだね」

葬儀屋の冷たい仕打ちに、河村の堪忍袋の緒が切れた。

「葬儀屋、てめえ！ この俺がこうまでして頼みこんでいるのに、それをいとも簡単に断りやがって！ あつたまきたぜ！ こんな店、俺がぶつ壊してやる！」

河村は錘を振り上げると、棺桶目掛けて振り下ろした。棺桶に錘が食い込み、木の破片が散らばった。

「な、何をするんだ！」

葬儀屋は仰天していた。

「今言つたろ？ ぶつ壊すって。聞こえなかったか？ 俺を怒らせたら、こうだ！」

河村は二発目を放った。また棺桶の破片が飛ぶ。

「やめろ！」

葬儀屋が河村に掴みかかった。

「はいやあたたたたたほわちゃあちょー！」

河村は葬儀屋の腹に飛び蹴りをお見舞いした。

「ぐほっ！」

葬儀屋の体が吹き飛び、壁に叩きつけられた。

「早く言わねえと、店がめちゃくちゃになっちまうぜ？　それで
もいいのか？」

河村が三発目をまさに繰り出そうとした時、

「待て！　教える！　トランシー邸の位置は……………」

葬儀屋はトランシー邸の場所を喋った。

「行き方は？」

河村は道順をも葬儀屋から聞きだすと、その場を後にした。

「ここからけっこうな距離があるようじゃないか？　歩いていくつ
もりか？」

「まさか。またアレをやるしかないだろ」

河村は大通りへ出た。ひっきりなしに馬車を通る。河村はそのひ
とつに目をつけると、走り出した。

「おい、止まってくれ！」

河村は馬車の前に仁王立ちとなり、大きく手を広げた。

「何だあんた、物乞いか？ 何も恵んでやるもんはないよ。とつとそこをあけるんだ」

御者が河村に冷たい視線を送りながら言った。またも河村は激怒した。

「この野郎、人をいきなり乞食扱いしやがって！ なめんじゃねえ」！

河村は飛翔し、御者の胸に飛び蹴りを見舞った。

「おおっ！」

御者は苦悶の表情を浮かべている。

「降りろこら！」

河村は御者を道端に放り出すと、馬車に乗り込み、乗客も錘で脅かして追い払った。

河村は再び御者となった。馬を操り、トランシー邸へと向かった。

「見えてきた！ あれがトランシー邸か！」

河村の目に豪華絢爛な大豪邸が入って来た。

「そのようだな。さあ、お前の旅を終わらせるんだ」

「当たり前だぜ」

河村は馬車をとめ、降りると、玄関に向かって走り出す。

荘厳な扉の前に河村は立った。

「ここにアロイスやクロードが……」

河村は思わず生唾を飲み込んだ。

「どれ、そろそろ俺も登場してやるか」

河村は片を叩かれた。振り返ると、そこには痩せぎすの全身黒ずくめの青年紳士が立っていた。

「！ 誰だお前は！」

「俺だ。シュトリだ。人間如きに姿を見せるのは久方ぶりだ。有り難く思え」

「何だよ、今更何しに来たんだよ」

「見物に決まってるだろう？　気が向いたら手助けしてやらんこともないが」

「けっ。好きにしろよ」

河村は扉に触れた。押せども引けども扉は開かない。

「鍵がかかってるようだな。どいてろ」

河村をどいた瞬間、扉が邸内に吸い込まれていった。

「お前何やった？」

「こんなもの、いわゆる朝飯前という奴だな。いいから行け。アロイスどもを懲らしめるんだろう？」

河村は邸内に侵入し、大声を発した。

「おいアロイス！　それにクロード！　それから三つ子ども！　俺はアロイスのハンナに対する蛮行に怒りを感じ、異世界からお前らを懲らしめにやってきた！　俺は平成救世主正義仮面ゼロ！　俺は逃げも隠れもしない！　そして不死身の男だ！　ラピュタ同様、何度でも復活する！　さあ、出てきやがれ！　俺は早く漫画の新刊が読みたいんだよ！」

河村の声に応えるように、三つ子が姿を現した。それぞれ髪型が違う。

「出てきたな、三つ子ども！」

「お前は何者だ？ このトランシーの紋に泥を塗りに来たのか？」

声の主はクロードである。

「泥？ ああそうだ、泥塗りまくってやりに来たんだよ。俺は平野綾のファンじゃねえが、それでも、あんなことは許さねえ」

「平野綾？ 誰だそれは？ ……日本人の名か？ お前、日本人なのか？」

「ばれちゃあ、しょうがねえ。俺は日本男児だ。大和魂もってるぜ」

「東洋の小さな島国の人間が、わざわざ旦那さまを懲らしめるために、この大英帝国までやってきたというのか。ご苦労な話だな」

「そうだよ、俺はここまでくるまでに苦労したぜ。まず最初に着いたのが森の中で」

「トンプソン、ティンバー、カンタベリー、こいつを殺せ。後始末も忘れずにな」

「おい、まだ俺の話が終わってねえぞ。人の話は最後まで聞けよ」

文句を言う河村に、三つ子が襲いかかる。三人は同時に飛び、空を舞った。河村を蹴りを食らわそうとする。

「おわっ！」

河村は逃げだした。三人は河村が立っていた場所に着地する。間をおかずに河村に走り寄る。

「三対一とは卑怯だぜ。おいシュトリ、俺に味方しろ」

「まだそれほどピンチとも言えんだろ。それに俺は見物するのが好きで、当事者として関わるのはあまり気が進まんだ」

「この薄情者め！」

河村がシュトリを罵る間も、三つ子は河村に迫ってくる。

「トンプソン、ティンバー、カンタベリーはただの使用人などではない。トランシー家の使用人だ。甘い考えは捨て去ることだ」

クロードが無表情で告げた。

「くっそ！ こんな一言も台詞のない脇役キャラにやられてたまるかよ！」

河村は必死で戦う術を考え始めた。

第十四章 金食器

三つ子がみるみる距離を縮めてくる。

「何してる河村？ 歌はどうした？ 忘れたのか？」

「おお！ そうだった！」

河村は息を大きく吸い込み、口を開いた。

「たとえ…終わる事の無い悲しみがあなた奪っても 離れてゆく心など此処には無いと言って 駆け寄った背中に問いかける明日がどんな形でも 揺るがなかったのはもう信じる事を忘れなくなかったから」

河村が歌っているのはテレビアニメ「黒執事？」のオープニングテーマ「SHIVER」である。河村の眼の色が変わった。

「うおおおおおおおおおおおおおおおお！ 主題歌パワーだ！」

河村は三つ子に向かって駆けていく。三つ子のひとりが河村に拳を放った。河村は的確に見切り、回避する。一歩足を踏み出し、錘で頭を殴打した。一人目の三つ子は床に昏倒した。

二人目は河村に蹴りを送って来た。これも正確に避けた河村は、二人目の喉を狙って錘を突き出す。二人目も喉を押さえながら、床に転がった。

三人目は蹴りと拳を交互に混ぜて攻撃してきた。しかし、主題歌パワーによって強化された河村の敵ではなかった。三人目が床を蹴って飛翔した時、河村も遅れて飛んだ。二人は空で対峙した。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！」

河村の錘が三人目の股間をえぐった。三人目はあまりの激痛に耐えかね、まともに着地できず、床に激突し、気絶した。

「これがアニソンプワーだ！ 俺の強さがわかったか、クロード！」

河村は得意顔でクロードを見つめた。しかし、三つ子の敗北を目にしても、クロードの顔に変化の兆しはない。冷淡さが伝わってくるその無表情に、河村は少し怯えた。

「な、なんだよお前、なんか言ったらどうだ？」

「下らん。たかが使用人を三人倒したくらいで、有頂天になるとは。無頼の輩は皆、お前のような男ばかりなのだろう。軽薄にして浅薄にして単純にして短絡的。要するに、お前は馬鹿だ」

「なんだとてめえ！」

パチパチパチパチ。

突如として、場違いな拍手が巻き起こった。拍手の主を河村は見

「いやあ、凄い。凄いよ。このトランシー家の使用人を一度に三人も倒すなんてね。ゼロって言ったっけ？ 君は凄く強い。いい見世

物を見せてもらったよ」

「お前は！ アロイス・トランシー！」

アロイスは笑っていた。自分の使用人が倒されたにも関わらず。

「うん？ 呼び捨てはいけないなあ。僕は仮にも伯爵なんだからさ。伯爵閣下、伯爵閣下と呼ばなきゃ。君の行為は貴族に対する不敬に当たる。不敬漢だよ、君は」

「誰がお前なんぞに閣下をつけるか！」

「ふうん。そういうこと言っちゃうんだ。……あ、そっか、君は僕を懲らしめにやってきたんだったよね。懲らしめられるようなことしたかな、僕？ ねえクロード、僕なんかやった？」

アロイスは微笑みながらクロードを眺めた。

「いえ、旦那様はそんなことはなさっております」

クロードがアロイスに深々と頭を下げる。

「クロードはああ言ってるよ」

「アロイスてめえ、お前ハンナの左目失明させたじゃねえか！ 俺はあのシーンを見て、平野綾ファンでもないのに怒りを感じ、ここまで来たんだよ！ わかったかこのクソガキが！」

「ああ、あれか。あれねえ。あれってそんなにいけないことなの？ だってハンナは僕の使用人じゃない？ いわば僕のために存在す

る玩具みたいなもんだよね。飼い主・持ち主である僕がどうしようと、僕の自由じゃないの？」

アロイスは笑みを絶やさない。

「お前何様のつもりだ！ 人を玩具みたいに言いやがって！ お前の様なキチガイは俺がこの手で倒す！ この平成救世主正義仮面ゼ口がな！」

「ねえゼロ、君は自分で救世主とか正義とか言ってて、恥ずかしく思ったことないのかな？」

「うるせえ！ 俺にいちいちケチつけんな！ このキチガイクソガキ！ ストッキングみたいな靴下なんか履きやがって、お前が腐女子・腐男子狙いまくりのキャラなのは先刻承知なんだよ！」

「あれは冷え症だから履いてるだけだよ。フジヨシやフダンシって何？ ……もういいや。あーもう、なんか相手するのが疲れてきたよ。この変てこな格好した男を、今すぐ僕の前から消し去ってよ、クロード。不愉快極まりないよ。もう限界」

アロイスが不快げに眉を寄せて言った。

「イエス、マジエスティ」

いつの間に握ったのか、クロードの手には金色のナイフとフォークが握られていた。無造作に河村に向けて放った。

「うおわっ！」

河村は床に伏せた。河村の頭上を金食器が通過する。

「金ぴかのナイフとフォークなんか使いやがって、とんだ成金趣味野郎だぜ。悪趣味だとは思わねえのか？」

クロードは河村の問いに答えず、第二撃を放った。

第十五章 河村英樹は二度死ぬ

河村は左へ走った。金食器が床に突き刺さる。クロードは攻撃の手を緩めず、次から次へと金食器を投げる。

河村は走った。とにかく走るしかなかった。走りながら、飛んでくる金食器を錘で叩き落しもした。

「こんな太つちよ相手に、いったい何分かってるんだよクロード。僕はいつまで目の毒を我慢していればいいの？ 早く！ 早く殺して！ 殺せ！」

アロイスが頭を掻き耑る。

「申し訳ございません、旦那様。今片付けてご覧にいます」

クロードがアロイスに一礼する。

「早くしてよ！」

クロードの金食器を投げるスピードが劇的に速くなった。走る河村の右足に金食器が突き刺さる。

「くそいてえ！」

河村は足を引きずりながらクロードの攻撃をさけようとするが、時すでに遅し。河村の体を次々と金食器が襲った。両足、両腕、腹、胸、手の甲、両肩、ありとあらゆる場所に金食器が深々と突き刺さっている。

「終わりだ」

一瞬でクロードが河村の目の前に移動していた。

「！」

河村は喉に暑いものを感じた。喉に金のナイフが突き刺さっていたのだった。

「またゲームオーバーか」

シュトリの呆れた声を最後に、河村の意識は薄れていった。

「ここは！？」

河村は再び自宅のトイレの前に立っていた。

「お前はまたも死んだのだ。自分でわかるだろう」

「ちい！・・・・・・クロードって奴は強敵だぜ」

「あいつも悪魔だからな。人間じゃない」

「何か！ 何かないのか！ 奴を倒す方法が！」

「さあな。自分で考えることだな」

「悪魔に効く呪文とか武器とか、教えてくれよ」

「断る。ネットで検索してみたらどうだ？」

河村はシュトリが言った通り、ネットで調べてみることにした。

「そうか！ そうだったのか！」

河村は何か発見をしたようだった。

「何かわかったのか？」

「ああ。これで奴を倒せるぜ。シュトリ、また頼む。移動する場所はロンドン中心部にしといてくれ」

「トランシー邸ではなく？」

「そうだ。よろしく」

河村は急いでトイレの前に立った。

河村はロンドンの大通りに居た。

「まずは宝石店を探さないとな」

「宝石なんか何に使うんだ？」

「まあ見てろって」

河村は道行く人に宝石店の場所を聞いた。

宝石店につくなり、河村は店員に銀をありったけ買いたいと言いだした。店員が銀をもってくると、その店員の頭を錘で殴って気を失わせた。駆け足で店を後にした。

「お前、強盗するのが好きになったのか？」

「まさか。これもクロードを倒すための作戦だぜ。さっきの店員には気の毒なことしたけどな」

河村は大通りを歩く。河村の目に、警察官の姿が入った。河村は近付いていく。

「おまわりさん、あっちの人気のない通りで喧嘩してる奴がいるんです。止めてやって下さい」

河村は警察官を人気のない場所に誘い出すなり、錘で鳩尾を突いた。警察官は地を這った。警察官から拳銃を奪い取る。

「お前やはり、強盗が趣味になってしまったんじゃないだろうな？」

「違っつて言ってるだろ。馬鹿なこと言っなよ」

河村は次に鍛冶屋の場所を聞いて回った。

鍛冶屋に着くなり、河村は錘で鍛冶屋を脅した。

「これで銀の銃弾を作るんだ！ この拳銃の口径に見合う弾をな！
作らねえと承知しねえぜ！」

待つこと数時間、河村は銀の銃弾を十数発手に入れた。

「これで完璧だ。準備万端、整った」

河村はにんまりと笑った。

第十六章 銀の銃弾

「シュトリ、俺をトランシー邸へ運んでくれ。今度こそクロードを仕留めて見せるぜ」

河村が意気軒高に言い放った。

「大した自信だな。それが単なる勘違いでないことを祈るばかりだ」

「クロード！ あいつはどこいったんだよ！ いないじゃないか！」

アロイスの叱責が飛ぶ。

「私にもわかりかねます。しかし、喉元にホークを突き刺しました。あれは致命傷になるでしょう。おそらく、もう生きてはいないかと」

「人を勝手に殺すなよな」

クロードの前に河村が現れた。

「お前は！ なぜ生きている！ 先ほどまでどこにいた！」

「ちょっとお前を倒すための下準備をしていたのさ」

クロードは河村が拳銃を手にしているのを確認した。

「そんなものが私に通用するとしても？　馬鹿な男だな」

「アハハハハハハハハハハハハハハハハ！　馬鹿だ！　本当に馬鹿だ！　そんな玩具じゃクロードは倒せないよ！　だってクロードは」

「旦那様」

クロードがアロイスの言葉を遮った。それ以上喋るなという言葉外
の含みである。

「へー、撃たれても死なねえのか？　それはさすがに嘘だろ？　お前ら二人で俺を担ごうって魂胆か」

「試してみるといい」

「避けるじゃねえの？」

「私は避けたりはしない。ここに断言する」

「ああ、そう。じゃ、遠慮なく撃たせてもらおうわ」

トランシー邸に銃声が轟いた。河村は全弾を撃ち尽くした。弾はすべてクロードの心臓付近に吸い込まれていった。

「ごぶおお！」

クロードの顔色が変わった。苦悶に歪んでいる。ついには両膝をついた。

「どうしたクロード！ 何が起こったんだ！」

アロイスがクロードに駆け寄る。

「…………お前！ この弾はまさか……………」

「銀の銃弾だ。吸血鬼や悪魔に効くってどっかのサイトに書いてあったんだよ。正解だったみたいだな」

「う、むうつうつうつうつ！」

「クロード、しっかりしてよ！ クロード！」

アロイスがクロードに抱きついた。

「旦那様、これまでのようです。こんな形で別れることになって申し訳……………」

クロードは絶命した。

「お前、よくもクロードを！ 許さない！ 絶対に許さない！」

アロイスが河村に向かって走ってくる。その目には涙が浮かび、河村に対する憎悪に燃えていた。

「うおおおおおおおおおお！ アロイス！ 俺は今まで数多の敵と戦ってきた！ 枢やなは自分の野望のため、ファンの思いを踏みにじり、原石慎太郎は青少年に有害だと言って漫画を規制しようとし、谷垣直人は誇大妄想に取りつかれ、帝国のを築き、

その皇帝になろうとした！ あいつらは俺の敵ではあったが、奴らにも奴らなりの理由が、動機があった！ しかし、アロイス、お前にはそんなものはない！ お前はただ、狂っているだけだ！ お前はただ、人間を玩具にして遊び、楽しんでるだけだ！ 俺は断じてそんなことは認めない！ 平成救世主正義仮面ゼロが、お前に鉄槌を下す！ うおおおおおおおおおおおおおお！ はいやあたたたたたほわちゃあちょー！」

河村は床を蹴って飛んだ。

河村の飛び蹴りがアロイスの胸に食い込んでいく。

「ぐふっ！」

アロイスは一メートルほど吹き飛ばされ、床に背中を叩きつけられた。アロイスは失神した。

「終わったな。それでは、偉大な勇者の御帰還といこうか」

一部始終を見物していたシュトリが言った。

「ああ。漫画の新刊買わなくちゃな」

「・・・・・・・・河村」

「何だ？」

「扉が開かない」

「なに！ こんなときに冗談はやめてくれよな」

第十七章 忘却と無視による遺恨

「はあはあ、シエルはあはあ………」

近藤春雄は「黒執事？」第一話のラストでシエルが登場したシーンを見、興奮状態に会った。何を隠そう、この二トはシヨタコンなのであった。近藤の本棚にはそれ系の本で埋め尽くされていた。

今はまだましな方で、シヨタコンの本能が強く刺激された時、近藤は強い行為に及ぶことも多かった。

近藤は第一話を見終わると、大きくため息をついた。

「ふう」

（終わってしまったのである。気になる終わり方であったである。これは視聴者をむずむずさせる制作側の戦略に違いないのである。しかし、そうはわかっていても、春雄は完全にその術中にはまってしまったのである。とにかく、とにかく早く続きが見たいのである。次回はシエル・セバスチャン回なのである。……他の人はどう思っているのだろうか？ 検索である）

近藤はパソコンを立ち上げ、グーグルで「黒執事？」と検索をかけた。すると、トップ項目に「黒執事？の世界にもっと浸ってみませんか」というのがあった。

（これは何なのだ？ 早速クリックである）

近藤はマウスを動かした。そのサイトへアクセスした途端、パソ

コン画面からまばゆい光が発せられた。

（！ 何が起こったのである！）

近藤の意識は途絶えた。

「どうだ？ 私の正体がわかったか？」

「わからねえ。お前いつたい誰なんだ」

「わからないか。それでは仕方ない。フラウロス様、お手数をおかけしますが、私の姿を河村たちに見せてやって下さい」

「フラウロスだと？」

シュトリの顔に陰が走った。

「私も一緒に映して下さいね」

突然、若い女の声が割りこんできた。河村はこの女の声に聞き覚えがあった。

「この声、どこかで聞いたことあんなあ。誰だろ？」

河村たちの前に巨大スクリーンが突如として出現し、そこには二人の男女が映し出されていた。中年男と若い女である。

「初めましてだな、河村英樹。私は竹田青滋！ TBSにその人あ

りと言われる名物プロデューサーだ！ 竹Pという愛称で視聴者に愛されてもいる！」

「竹田青滋といやあ、SEEDやハガレン、エウレカセブン、コードギアスとかの企画者じゃねえか！」

「まだまだ甘いな、河村！ 私が関係したアニメは、他に機動戦士ガンダムSEED DESTINY、BLOOD+、天保異聞妖奇士、地球へ…、DARKER THAN BLACK 黒の契約者、機動戦士ガンダム00、灼眼のシャナII（Second）、マクロスF、バスカッシュ！、DARKER THAN BLACK 流星の双子、戦国BASARA弐。……そして忘れてならないのは、黒執事一期と二期の企画もこの私であるという事実だ！」

竹田の顔がゆでだこのように真っ赤になった。

「え！ お前黒執事の企画もやってたの？ 知らなかった」

「……河村英樹、お前はかつて、ゼロのコスプレをして黒執事の出演声優やスタッフを襲った。そのとき、私は仕事で外出中で難を逃れたのだった。しかし、私の不運はそこから始まったのだ！」

竹田の脳裏に事件後、被害スタッフの発言が蘇る。

そっぴいえばさ、竹田さん襲われてないよね。何でだろ？

あの人、意外に存在感薄いから、犯人も忘れちゃったんじゃないの？

そういうこと言うなよ。本人に聞かれたらどうすんだよ。まあでも、あの方はラッキーだったよな。

「河村、お前にそのときの屈辱がわかるか！ あれだけのヒット作の制作に参加していながら、忘れ去られ、無視されたという現実。これほど辛く、無念なことがあるか！ 私はお前によって生涯拭い去ることのできない恥辱を受けたのだ！ 絶対に許さん！」

「竹田さん、私にも喋らせて下さいよ」

隣の女が竹田の肩をつついた。

「そうだったね。すまない。君もどうぞ」

「このクソニート、よく聞きなさい！ 私は田村ゆかり、黒執事シリーズでエリザベス・ミッドフォードを演じていたの」

「ああ！ リジーの声だったのか！ 気付かなかった」

「このデブキモオタニート！ あたしもあんだのおかげで大恥かかされたのよ！ あんた、あたしも黒執事に出演した声優のひとりなのに、襲わなかったでしょ！ そのせいで、あたしも竹田さんみたいに襲われた声優さんから言われたんだから！ もう最悪！」

「襲われた方がよかったとか、おかしな女だな」

「うつさい！ このボケなすが！」

「これは私たちの復讐なのだよ！ 河村、お前はもうそこからこの世界に戻ることはできなくなった。一生をそこで過ごすことになる」

「マジかよ！？」

河村は事態の深刻を痛感せざるを得なかった。

第十八章 ルシファー・ノート

「フラウロス、なぜ黙っている？」

それまで口を閉ざしていたシュトリが発言した。

「ククククククククク、そんなに俺に話して欲しいのか、シュトリ。よからう。ならば語ってやろう。あれはいつのことだったか、魔王陛下の御前で、お前は俺を貶めた。そのために、俺は役職を解かれ、階級も下げられたのだ」

「そんなこともあったな。確か、お前の策ではある蟻の集団を別のそれに襲撃させ、一方的に殺戮すると言ったが、俺はそれではあまりにつまらないと思い、魔王陛下にその旨申し上げたのだ。そのためにこんなことを？」

「そんなこと？ そんなことだと！？ ……まあいい。俺はあの日からお前への復讐のために生きてきた。そんなときだよ、何でも願いが叶うというルシファー・ノートの存在を知ったのは」

「お前はそれを今手にしているというわけか」

「そうだ。ルシファー副王陛下に何度も何度も懇願して、やっと手に入れたのだ」

悪魔フラウロスはそのときの様子を思い出していた。

ルシファー・ノートを貸してほしい？ 何言っただお前、これは俺様専用だよ、貸せるわけねえじゃん。まあ、どうしてもって言っんなら、あれだ、とりあえず、ザリガニ殺してこいや。六六六万匹くらいかな。それだけ殺して来たら、半頁だけくれてやるよ。

「気が遠くなるような年月が経過した。私はようやく六六六万匹のザリガニを仕留め、それを副王陛下に報告した」

へ？ ザリガニ六六六万匹殺してきたって？ 何の話だ？

「副王陛下は完全に忘却してしまっていた。私は粘り強く話をし、陛下に約束を思い出させることに成功した」

ああ、あれね。思い出したわ。ほい、半頁くれてやる。・・・話は変わるんだけどさ、今度地球のヨーロッパ地方のドイツのさ、ひとりの青年に憑依したりして操ってやろうと思ってんだよ。そいつに大暴れさせて、地球は大騒動になる。大勢人も死ぬ。

ドイツ人てのは勤勉で真面目、インテリのイメージだから、そんな奴が出てきたら、もう永遠にトラウマ抱え込むことになる。楽しくなるぜ。

「ルシファー・ノートを半頁手に入れた私は、お前たち二人がとるべき行動を書き込んだ。黒執事？の世界に二人揃って侵入するようになる。俺が書いた筋書き通りだ」

「何だよ、俺はお前ら悪魔の確執に巻き込まれたってことかよ。勘弁だぜ」

河村が不満げに漏らした。

「黙れ河村！ お前には罰が下されて当然なのだ！」

竹田が吼えた。

「河村、お前の様な人間がいるから、私は苦しむ羽目になったのだ！ そもそも私は黒執事などに関わりたくはなかった！ もっと壮大なスケールのアニメに関わりたかった！ 私が作りたかったもの、それは反米アニメであり、戦争に翻弄される人々を描く骨太な人間ドラマだったのだ！ それがどうした！ 黒執事なんてものは、所詮腐男子や腐女子向けの変態ショタコンアニメじゃないか！ 私は変態御用達のアニメを作るためにこの仕事をやっているわけではない！ 黒執事なんぞ、糞食らえだ！ そういうときに出会ったのが、フラウロス様だ。フラウロス様は何でも協力してくれると言う。願ったりかなったり、渡に船とはまさにこのこと。そこで私は一計を案じた。お前を利用し、黒執事？の世界を滅茶苦茶に破壊する計画

[illegible]

竹田が狂ったように大笑した。

「竹P、お前もう正気じゃねえな」

「その愛称をお前が使うことを、私は許さん！」

今まで笑いまくっていた竹田が豹変し、激しい怒りを露わにした。

「そうかそうか。そりゃ、悪かつたな」

竹田の顔がまた変化し、今度は笑顔を浮かべ始めた。

「いいことを教えてやろう。私はフラウロス様の献策に従い、ネットである工作を行った」

「ネット工作？ 何をやったというんだよ？」

「何、簡単なことだ。あるサイトにアクセスすると、お前たちがいる世界、つまり黒執事？の世界に飛ばされることになっていたのだ。しかも腐男子化・腐女子化・シヨタコン化するようにフラウロス様がルシファー・ノートにお書き下さった。その世界では、腐男子・腐女子・シヨタコンが大量発生していることになる」

「な、なんだつて！」

「奴らは俺がファントムハイヴ邸に行くようにルシファー・ノートに書き込んだ。今頃は落城しているかもな。ククククククククククククククク」

フラウロスの哄笑が館に大きく響き渡った。

「シュトリ、今すぐファントムハイヴ邸へ俺を瞬間移動させる！」

「了解だ。しかし、今からで間にあうかどうか」

「そこを間に合わせるんだよ！」

河村はトランシー邸から姿を消した。

[illegible]

竹田は大笑を続けた。

第十九章　これが世に言う「ファントムハイヴ邸の戦い」である

ファントムハイヴ邸では大変な騒ぎが起きていた。突如として、大勢の人間が現れ、襲いかかって来たのだ。

「こいつらどうなってんだ、どこから沸いてきた？」

バルドが舌打ちしながら、機関銃を操作する。けたたましい音とともに、弾丸が放たれ、襲撃者たちをなぎ倒す。不思議なことに、被弾した者、倒された者たちは姿を消していくのである。

「私にもわかりませんです。しかし、ここは私たちが坊ちゃんをお守りするです」

メイリンが二丁拳銃を発射しながら言った。射撃は正確で、眉間を打ち抜かれた者たちが次々と消えていく。

「そうだよ！　ここは僕らで守るんだ！」

フィニが襲い来る者たちに突進し、手当たり次第に放り投げていく。

タナカも得意の柔術で襲撃者を倒していった。

「しかし、こうたくさんやってこられては、きりがありませんね。はあ………」

セバスチャンが銀食器を投げつけながら、ため息をつく。

[illegible]

近藤は涎を垂らしながらも、全軍に演説をぶった。涎を垂らしているのは近藤だけではなかった。近藤率いる腐男子・腐女子・シヨタコン軍の一員はみな、一様に思い思いの妄想に耽り、口元は涎で汚れていた。

河村はそんな有様のファントムハイヴ邸に瞬間移動した。

「もう始まつてるじゃねえか！ こいつらの狙いはシエルやセバス

チャンか！ セバスチャンは自力で何とかできるだろうが、シエルは俺が守る！ うおおおおおおおおおおおおおおおお！

河村は近藤軍に向かって駆けだした。とにかく目に入る敵を錘で叩く。頭を打ち、喉元を突き、股間を叩き、腹や胸を打つ。

倒せども倒せども、敵の勢力は衰えない。そればかりか、敵の数が増ってきているような覚えさえ河村は感じた。

「突撃である！ とにかく突撃である！」

聞きなれた声が河村の耳に届いた。声の方角を見た。戦友の近藤春雄がいた。

「春雄さん、こんなところで何やってんだ！？」

河村は近藤に近寄り、向き合った。

「ゼロ！？ なぜここに？」

「話せば長くなるが、アロイスを倒すためこの世界に入り、いまさつき奴をぶつとばしてきたんだが、ファントムハイヴ邸が危ないと思っ、今はここを守るためにやってきたんだ」

「何！？ ならばゼロは春雄の敵なのである！ はおおおおおおおおおおおおおお！」

近藤が河村に張り手をかました。

「お、おい、待てよ！」

河村は一步後退して回避した。

「俺が春雄さんの敵？ 俺たち戦友だろ？ どうしちまったんだよ、春雄さん？」

河村は動揺しきっていた。

「フヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒ、春雄はシエルとッ
したいのである！ それからいろいろと楽しみたいのである！ そ
れこそが春雄の念願の夢なのである！ それを阻むものはすべて敵
排除させてもらうのである！ ゼロとて、例外ではないのである！
ほおおおおおおおおおおおおおおおおおお！」

近藤が再び河村に襲いかかる。鋭い張り手の連続技だ。河村は錘
でそれを悉く受け止めた。

「春雄さん、正気に戻ってくれ！ お願いだ！」

「はほおおおおおおおおおおおおおおおお！」

河村の懇願など無視して、近藤はなおも張り手を送り続けた。

「くっそー！ しょうがねえ、春雄さんいえども、手加減しねえ！
うおおおおおおおおおおおおおおおおおお！」

河村は錘を振り下ろす。しかし、近藤はいとも簡単に受け止めて
見せた。

「こんなもの、春雄には通用しないのである！　ほはおおおおおお
 おおおおおおおおおお！　」

近藤は錘を力強くひっぱった。

「おうわおっ！」

河村の体は宙を舞い、大地に叩きつけられた。

「ゼロの負けなのである！・・・シエル、シエル、シエル、フヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒ」

近藤は河村を捨て置き、ファントムハイヴ邸へ近付いていった。

第二十章 サタン・ノート

「いてえー！ 春雄さん、マジでぶん投げやった」

河村は背中をさすりながら、起き上がった。近藤といえば、館目掛けてまっしぐらに突き進んでいた。

「待て、春雄さん！ 春雄さんは俺が止めて見せる！」

河村も駆けた。

「さっきから外がうるさいと思って来てみたら、これは何の馬鹿騒ぎだ？ こいつらは何者だ？ 僕に説明しろ、セバスチャン」

シエルがセバスチャンに説明を命じた。

「それがよくわからないですよ、坊ちゃん。何やら突然現れ、襲いかかってきました」

「よくわからない？ ならこいつらに直接聞いてみればいいだろう？」

「それはもう試しました。しかし、ウヘヘヘヘヘヘヘヘとか、フヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒとか、言うだけで、まるで意味をなさない言葉しか話さないのです」

セバスチャンは困惑顔で申し訳なさげに言った。

「フン。気味の悪い連中だ。頭がどうかしてるようだな」

「ええ。それに、どうやら坊ちゃんや私が目当てのようなのです」

「何だと？ それは本当か？」

シエルは眉間に皺を寄せて言った。

「うわ言のように坊ちゃんや私の名を言っていましたから」

「ますます気味が悪いな。セバスチャン、命令だ、こいつらを全員殺せ」

「イエス、マイロード」

セバスチャンが畏まって答えた。

近藤はシエルの姿を認めた。

「シエル！ やっと会えたのである！ フヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒ！」

近藤は狂喜した。口からは涎をまんべんなく垂れ流し、大きく口を開けたその顔は、まぬけ面と言ってさしつかえなかった。

「春雄ー！」

背後から近藤の名を呼ぶ者があつた。近藤は振り返つた。

そこにかつての戦友、ゼロこと河村英樹の姿があつた。河村は錘を大きく振りかぶっている。

近藤はシエルを遠目からでも拝むことができた喜びに支配されており、とつさに体を動かすことができなかった。

錘が振り下ろされ、近藤の頭を砕いた。その瞬間、近藤は姿を消した。

総司令を自称した近藤を倒してもなお、腐男子・腐女子・シヨタコン軍の攻勢は留まるところを知らなかった。

「春雄さん倒しても何も変わんねえじゃん！」

「それはそうだ。大本を断たない限り、この事態は收拾できない」

「大本を断つつつたって、何をどうすりゃいいんだよ？」

「知れたこと。フラウロス、竹田、田村の三名を倒すのだ」

「そんなこと言つたつて、俺やお前は这个世界に閉じ込められて出られないんじゃないのか」

シュトリが懷から紙きれを取り出した。

「これは何だと思う？」

「何ってただの紙じゃねえの？」

シュトリは首を横に振った。

「これはサタン・ノートだ。魔王陛下から頂戴したものだ」

「サタン・ノート！ そんなもんまであんのか！」

「ある。六六六万匹のゴキブリを生み出すことと引き換えに、手に入れた。これを使えば、この状況を打開することはいともたやすい。ルシファー・ノートの効果も打ち消すことも可能だ」

「そんな便利なもんがあるんなら、初めから使ってくれよな」

河村が不満げに呟いた。

「切り札は最後まで大事にとっておくべきだとは思わないか？ 簡単に使ってしまったては、面白味に欠ける」

「またお前のポリシー聞かされるのか。もういいからさ、とりあえず、こいつらなんとかしてくれよ」

河村は腐男子・腐女子・シヨタコン軍を指差して言った。

「それは断る。お前は直ちにお前が元居た世界に戻り、竹田と田村を倒すのだ。フラウロスの方は俺が何とかする。それでは、お前を

飛ばすぞ」

シュトリがサタン・ノートに書き込んだ。

「オツケー。あと、どうでもいいけど、ゴキブリ六六六万匹と交換とか、すげえくだらねえ話だな、おい。サタンて奴はどうかしてんじゃないのか？」

シュトリは河村の問いに答えなかった。次の瞬間には河村の姿は消えていた。

第二十一章 新撰組パワー

竹田邸にフラウロスの驚愕の声が轟いた。

「サタン・ノートだと！？ まさか奴が持っていたとは！？」

予想外の展開にフラウロスはうろたえしきっていた。

「フラウロス様、我々の計画はどうなるのです！？」

竹田も焦り始めた。そうになると、田村も落ち着かない。

「二人とも、顔色が悪いぜ？ 流行りの熱中症にでもかかったか？」

三人をあざ笑うかのように、河村が現れた。

「か、河村！」

竹田が度肝を抜かれたようだ。

「竹田青滋！ 黒執事シリーズの企画者でありながら、黒執事ファンを悪用し、自ら関わった作品世界を破壊しようとしたその罪、俺は許さねえ！ それに田村ゆかり！ お前もお前だ、出演したアニメを壊そうなんて、自分で自分の首を絞めていることに気がつかないのか！」

河村が錘を田村に向ける。

「ひっ！」

田村は情けない声を上げて失神してしまった。

「河村英樹！ お前如きに私の気持ちがあつてたまるものか！ 私はない、反米アニメ・戦争アニメを描くことだけが生き甲斐なのだ！ 壮大なスケールの物語に関係し、視聴者に多大な影響を与える！ それこそが企画者としての何よりの喜び！ それなのに、あんな腐男子・腐女子・シヨタコンアニメを私に企画させた連中は、頭がどうかしているんだよ！ 私は確かに力をもっているんだよ！ 世界を変える力を！ アメリカの一極支配を粉碎する力が、私にはあるんだ！ ……それなのに、黒執事なんかやらせやがつて！ ……私の気持ちがあつるか！ わかるかと聞いているんだ、河村英樹！」

竹田は時折唾を飛ばしながら、自らの思いを熱く語った。

しかし、河村には賛同できるものではなかった。

「わかんねえなあ、竹P。ニートの俺がとやかく言うのもおかしいが、仕事は仕事で割り切つてやらねえといけないと思つぜ？ 嫌ならやめればいいし。それが大人の態度つてもんじゃねえの？」

「な、何を！ ニートの分際で、生意気な！ フラウロス様、早々にこやつをぶちのめして下さいませ！」

竹田が天井を見上げて言った。

「いいだろう。今からそこに黒執事ファンで屈強な者を六人送る」

六人の男が現れた。それぞれ筋肉隆々で、スポーツや武術で体を鍛えていそうな男たちばかりだった。

だが、河村は物おじしなかった。極めて冷静な態度で、ラジカセにCDをセットした。

「シュトリ、バックアップは任せませ！」

「わかった」

天つ風よ 時の羽さえ

この思ひは十六夜に

凜とした あなたと同じ

手折られる花 色は匂えど

言の葉も届かないまま

憂う枝から消えた

流れているのはテレビアニメ「薄桜鬼」オープニングテーマ「十六夜涙」である。

「うおおおおおおおおおおおおおおおお！ 新撰組パワー！」

河村は六人に向かって走った。

河村は飛びあがった。

「はいやあたたたたたほわちゃあちよー！」

最初に目に入った男の顔目掛けて、飛び蹴りをお見舞いした。男はうめく間もなく床に昏倒した。

二人目はパンチを繰り出してきた。河村は的確に回避し、脇腹に拳を連続で殴打する。二人目も床に転がった。

三人目は突進してきた。河村はそれも避け、三人目の首筋に手刀を叩きこんだ。三人目も眠ることとなった。

四人目は蹴りを送って来た。それも器用に避け、四人目の足が虚しく空を切ったところを、股間を蹴った。四人目は股間を抱えて両膝をついた。

五人目はパンチとキックを交互に繰り出した。河村は徐々に後退していく。

五人目は河村が防戦一方になったと見て、ますます攻勢を強めた。

河村は壁に背中をついた。それを見て、五人目は余裕の笑みを浮かべた。

「しゅわっち！」

河村は壁を蹴って飛翔し、五人目の胸に蹴りをめり込ませた。五人目は床に背中を打ちつけ、気絶した。

六人目は何を思ったか、竹田のパソコンを手にとって、河村に殴りかかって来た。

「あ、おい、それは私のパソコンだぞ！？」

竹田は突然の出来事にあっけにとられていた。

河村は素早く動いた。六人目がパソコンを振り下ろす前に、その喉に拳を打ちこんだのだ。六人目はパソコンを手から落とし、喉を押さえ、床に転倒した。

「な、なぜだ！　なぜ筋肉男たちが六人も、こんな肥満体の男に敗れるのだ！？　こ、これはどういうことなんだ！？」

竹田は動転し、視線が定まらない。

「言っただじゃねえか、これが新撰組パワー、もっと言えば、アニソンパワーなんだよ」

河村はにやりと笑って言った。

最終章 使命

「次はお前がやられる番だぜ、竹P」

河村は竹田を睨みつけ、言った。

「フ、フラウロス様、なにとぞ私にご助力願います！」

「無論だ。シュトリの手先に敗れてなどなるものか」

竹田に異変が生じた。わけもなく感情が高ぶり、体中から力が漲って来た。

「おおおおおおおおおおおおおおおおお！」

竹田が唸り声を上げ、河村に向かって駆け出す。

「俺も負けるわけにはいかねえんだ！ うおおおおおおおおお
おおお！」

河村も駆けた。二人は拳と拳をぶつけ合った。力はほぼ互角。

「私はなあ、米帝を倒すという大切な使命があるんだよ！ 自分が企画したアニメを使つてな！ これは私にしかできないことなんだ！ だが河村、お前には何か使命があると言うのか？ ニートに過ぎないお前に何の目的がある？ お前は何のために生きている？ 人生についての何の目的もなく、毎日が無意味に、無意義に、無駄にだらだらと消費しているだけのお前らニートなんかに、アニメ史に名を残す、この偉大な私が敗れ去ることなど、本来あってはなら

「これまでだ、竹田。ルシファー・ノートが文字で埋め尽くされ、もう書けなくなったのだ。ルシファー・ノートが使用不能になった以上、役職や階級が上のシュトリに、俺は対抗する手段はない」

「そ、そんな！」

「勝負あつたな、竹P」

河村が悠然と竹田に歩み寄る。

「こ、これは夢だ！ そうだ！ 夢なんだ！ 私は何か悪い夢を見ているに違いない！」

竹田は自分の頬をつねってみた。

「おかしい！ 夢のはずなのに、ひねると痛いじゃないか！ これはどうということなんだ！ 誰か教えてくれ！」

竹田は絶叫していた。それは魂の咆哮であつた。

「自分が認めたくない現実を悪夢だと決めつけても、何も変わりはない。そんなこと、本当はお前だつてわかってんだろ、竹P？」

そんな竹田の首筋に河村は手刀を叩きこんだ。竹田は気を失い、床に崩れ落ちた。

竹田が倒されたさまを見て、呆然自失している者がいた。フラウロスである。彼は魔界で放心状態にあつた。

フラウロスは肩を叩れた。叩いた主は、魔界の副王ルシファーであつた。

「フラウロス、お前またシュトリの奴に負けたんだつて？ 魔界中の噂になつてゐるぜ。せつかく俺がノート半頁やったのに、負けやがつて、お前どういふつもりだよ？ とりあえず、ノートは没収な」

ルシファーはフラウロスから半頁のノートをひったくつた。ルシファーの掌でノートは燃えた。

「そんなに俺の顔に泥塗りたいか？ え、どうなんだよ？」

「申し訳ございません。決して陛下の御顔に泥を塗ろうなどとは、露知らず」

フラウロスは何とか言葉を絞り出して返答した。

「結果的にそうなつてんじやんか。俺までみんなの笑いもんだよ。どう責任とつてくれんだよ、おい？」

「・・・・・・・・なんなりと、御用命下さいませ」

「ああ、そう。じゃあさあ・・・・・・・・」

ルシファー・ノートが燃えたことにより、ノートに書かれた事柄も効力を失い、黒執事？の世界に大量に送りこまれた人間たちも、人間界に戻つていった。こうして黒執事？の世界は再び平穏を取り

戻した。

河村は自宅に戻って来た。戻ってくるなり、風呂に入り、シャワーを浴びた。その後、着替えをしてから本屋に行き、買いたかった漫画の新刊を購入した。

「やっと読めるぜ」

河村は自室で寝ころび、漫画本を読み耽りながら、呟いた。

終

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6556m/>

『黒執事?へGO!』

2010年10月8日11時31分発行